

日本産 *Pristicerops* 属の分類学的再検討 (膜翅目ヒメバチ科ヒメバチ亜科)

環境資源学専攻 生物生態・体系学講座 昆虫学 菊地 波輝

1. はじめに

ヒメバチ亜科はヒメバチ科の最も巨大な単系統群の一つである (Quicke 2014)。本亜科の寄生蜂はすべての種が鱗翅目の単独性内部寄生蜂であると考えられており、農林業の生物防除における重要な分類群である。本亜科は日本産ヒメバチ科で最も種数の多い亜科で、現在までに 79 属 270 種が記録されている (小西 2015)。しかし、近年の分類学的研究はほとんど行われておらず、Townes ら (1965) によって旧北区東部のヒメバチ科目録が発表されて以降、わずか 5 種が新たに記載・記録されたのみである (Momoi 1965; Kusigemati 1989, Kikuchi & Konishi 2015a; 2015b)。演者はこれまで、日本産ヒメバチ亜科の分類学的基盤を構築すべく研究を進めてきた。修士課程では、特に Platylabini 族 *Pristicerops* 属に着目し、本属の分類学的再検討を行った。*Pristicerops* 属は世界から 12 種が既知の比較的小さな属で、日本からは 2 種が既知であった。本研究では、日本産既知種の詳細な再記載および確認された複数の未記載種の記載とともに、属の定義を再検討した。

2. 方法

本研究は北海道大学, 鹿児島大学, 農業環境技術研究所, 神奈川県立生命の星・地球博物館, 大阪市立自然史博物館および演者の収集した標本を基に行った。外部形態は主に双眼実体顕微鏡 (Nikon SMZ800) を用いて観察した。雄交尾器は解剖して 10% KOH 水溶液で約 75 °C, 30 分間処理し, 双眼実体顕微鏡および光学顕微鏡 (Nikon E800) を用いて観察した。形態用語は主に Townes (1969) に準拠し, 一部改変した (Sime & Wahl 2002)。翅脈の名称は Gauld (1991), 体表の点刻構造については Eady (1968) に従った。

3. 結果と考察

日本産 *Pristicerops* 属の形態形質を検討した結果, Townes ら (1965) の見解と同様, Heinrich (1961) によって記載された *Pristicerops* 属は *Pristicerops* 属の同物異名であると結論した。本属の日本産種から 8 種の未記載種を認め, それらを記載した。既知種については, ハコネコヒメバチ *Pristicerops hakonensis* (Uchida, 1926) は北海道および九州から新たに分布を確認し, コセヒメバチ *P. kosensis* (Uchida, 1932) は北海道から新たに分布を確認し, 未知であった雄を記載した。10 種のうち雄が発見された 7 種の雄交尾器を比較し, 種分類に有用であることを認めた。

4. まとめ

日本産の本属の種数は 10 種となった。この種数は, 解明度の比較的高いヨーロッパ地域と比較しても極めて多く (表 1), 日本におけるヒメバチ亜科寄生蜂の潜在的な種多様性の高さを示しているといえる。本研究で見つかった未記載種のうち 3 種は雄が不明であり, 1 個体またはわずかな標本しか見出されなかったものも含まれている。このため, 日本産の本属にはさらなる未記載種が存在する可能性がある。

地域	種数
日本	2 spp. + 8 new spp.
旧北区 (日本を除く)	5 spp.
新北区	2 spp.
東洋区	3 spp.

表 1. 地域別既知種数